

古事記に学ぶ その 29
大長谷命(雄略天皇)のその後

ここで突然、「大長谷若竹命(おおはつせのわかたけのみこと)」という名前が登場する。
古事記原文でも、ここまで「大長谷王」と表記していたが、この章からはフルネームで出てきたので、一瞬戸惑った。

<1> 大長谷命(雄略天皇)の御子

大長谷若竹命は、大和の長谷(はつせ)に朝倉の宮を造り、雄略天皇と名乗って天下を治めた。
宮があった場所は近鉄大阪線の大和朝倉駅の北側の脇本という所だと言われている。地図で確認して見たら、三輪山南麓の大和川の流れに面した所だとわかった。 <https://yahoo.jp/yMJMjDg>
穴穂命(安康天皇)に殺された大日下王(おおくさかのみこ)の妹である若日下部王(わかくさかべのみこ)を妻としたが、御子はいなかった。

また、都夫良意富美(つぶらおおみ)の娘である訶良比売(からひめ)を約束通り妻とした。
前号(古事記に学ぶ その 28)に戻るが、大日下王の遺児である目弱王(まよわのみこ)が安康天皇を殺して親の仇を討った時に、幼い目弱王をかくまい、結果的に自死することになったのが大臣(おとど)の都夫良意富美である。

大長谷若竹命(雄略天皇)は訶良比売との間で●白髪命(しらがのみこと)と●若帯比売命(わかたらしひめのみこと)を生んだ。

白髪命を記念して白髪部(しらがべ)を設け、長谷部の舎人、河瀬の舎人を設けた。

<2> 中国からの渡来人

この天皇の御世に、大陸から呉人(くれびと)が渡来した。呉人を置いた場所を「呉原」と名付けた。
呉人は、朝鮮半島以外からの渡来者で、中国の南北朝時代(5世紀前後～6世紀)の南朝諸国の人を指すようである。また呉原、は現在の「高市郡明日香村大字栗原」と言われている。地図で確認してみたら、高松塚古墳とキトラ古墳に挟まれた所だとわかった。

<3> 結納になった白い犬

若日下部王が河内の日下にいた頃、天皇が大和から日下山を越えて難波(なにわ)へ行く時、山頂から見下ろしていたら、堅魚木(かつおぎ)付けた立派な家を見つけた。

「あの家は誰の家か」と尋ねたところ、側近の者が「志幾の大県主の家です」と答えた。

(志幾:しき:現在の八尾・藤井寺・柏原にまたがる一帯で県主が置かれていた事実があるとのこと)
大君の宮殿に似せて造った家はけしからん、として焼き払いを命じた。

大県主は慌てて出てきて平身低頭して、身分不相応な建物を建てたことを謝罪した。そして謝罪の印に貢物を献上した。貢物は、白い犬に布を着せて、鈴をつけて、●腰佩(こしはぎ)という者に手綱を取らせて献上した。天皇は、家の焼き払いを取りやめにさせた。

白い犬を手に入れた天皇は、若日下部王(わかくさかべのみこ)にこの犬を「結納の印」として贈った。
犬を受け取った若日下部王は、大和(長谷)の宮へ参じてお仕えすることを約した。

<4> 80年待たせた女

天皇が三輪山の麓を流れる三輪河の畔を歩いている時、美しい少女が河で洗い物をしていた。
少女に名を問うと、「引田部(ひけたべ)の●赤猪子(あかいこ)です」と返ってきた。

天皇は、「近いうちに宮殿に召すから、どこへも嫁に行かぬように」と言って、その場を去った。
赤猪子(あかいこ)は、毎日お召しが来るのを待ったが、80年の歳月が経っても音沙汰がなかった。
このままで終わっては何とも情けないと思った赤猪子は、結納の品を積み重ねて宮殿を訪れた。
「お前はどこのお婆さんかね」と天皇に問われた赤猪子は、経緯を説明した。
天皇は、すっかり忘れていたことを詫びて、いくつかの歌を与えた。赤猪子も歌を返した。
赤猪子が流す涙で丹摺(にずり)の衣がすっかり濡れてしまった。
天皇は、老女となった赤猪子に多くの引き出物を与えて、故郷へ帰してやった。

<5> 吉野の旅でのできごと

天皇が吉野の離宮に出かけた時、吉野河のほとりて美しい少女と出会った。この少女を召し入れて
長谷(はつせ)の宮殿に帰った。その後、再び吉野に出向いた折、出会った場所に足台を造って、その
上で琴を弾き少女に舞をまわせた。
また、吉野の阿岐豆野(あきずの)で狩をした時、足台の上に座っていると蛇が飛んできて腕を刺し
た。すると、そこへ蜻蛉(あきず:トンボのこと)が来て、その蛇を食べて飛び去った。この光景を見て天
皇は歌を詠んだ。歌はこの時の情景を語るもので長い歌だが、こんな言葉で結んでいる。
「……、だから、山々のそそり立つ大和の國を蜻蛉島(あきずしま)と言うのだ」
このことから、この地を阿岐豆野(あきずの)と言うようになった。
大和上市から蛇行する吉野川に沿って伊勢街道を東進した所(吉野郡吉野町大字宮滝)だと言われ
ている。 阿岐豆野 <https://yahoo.jp/VK5WZ2>

<6> 葛城山に現れた神

天皇が葛城山(かずらきやま)に登った時、大きな猪が現れた。鎬矢を放ったが猪はものともせず攻め
てきたので、怖くなって傍らの榛(はん)の木によじ登った。そして、この時の経験を歌にした。
別な日に再び葛城山に登った時、側近の役人たちは紅い紐で結んだ青摺の衣を着ていた。
その時、向うの山の尾根を登る一団が目にとまった。着衣・人数など区別ができぬほどにそっくりだ
たので、側近の者に「あれは何者か」と尋ねさせると、先方からも同じ問いかけがあった。
あわや、弓に矢をつがえて一戦となろうとした時、天皇が「まずは名を名乗りあおう」と提案。
先方の者がその口火を切った。「私は悪事(まがごと)も善事(よごと)も一言で決めてしまう言離(こと
とさか)の神で、葛城の●一言主大神(ひとことぬしのおおかみ)である」
天皇は恐れかしこみ、配下の者に命じて太刀や弓矢や衣装を下ろさせて、これを大神に献上し、一言
主大神(ひとことぬしのおおかみ)が現身(うつしみ)となって現れたことへの敬意を示した。
一言主大神は、山を下りて長谷の宮殿に戻る天皇を長谷の山の登り口まで見送った。

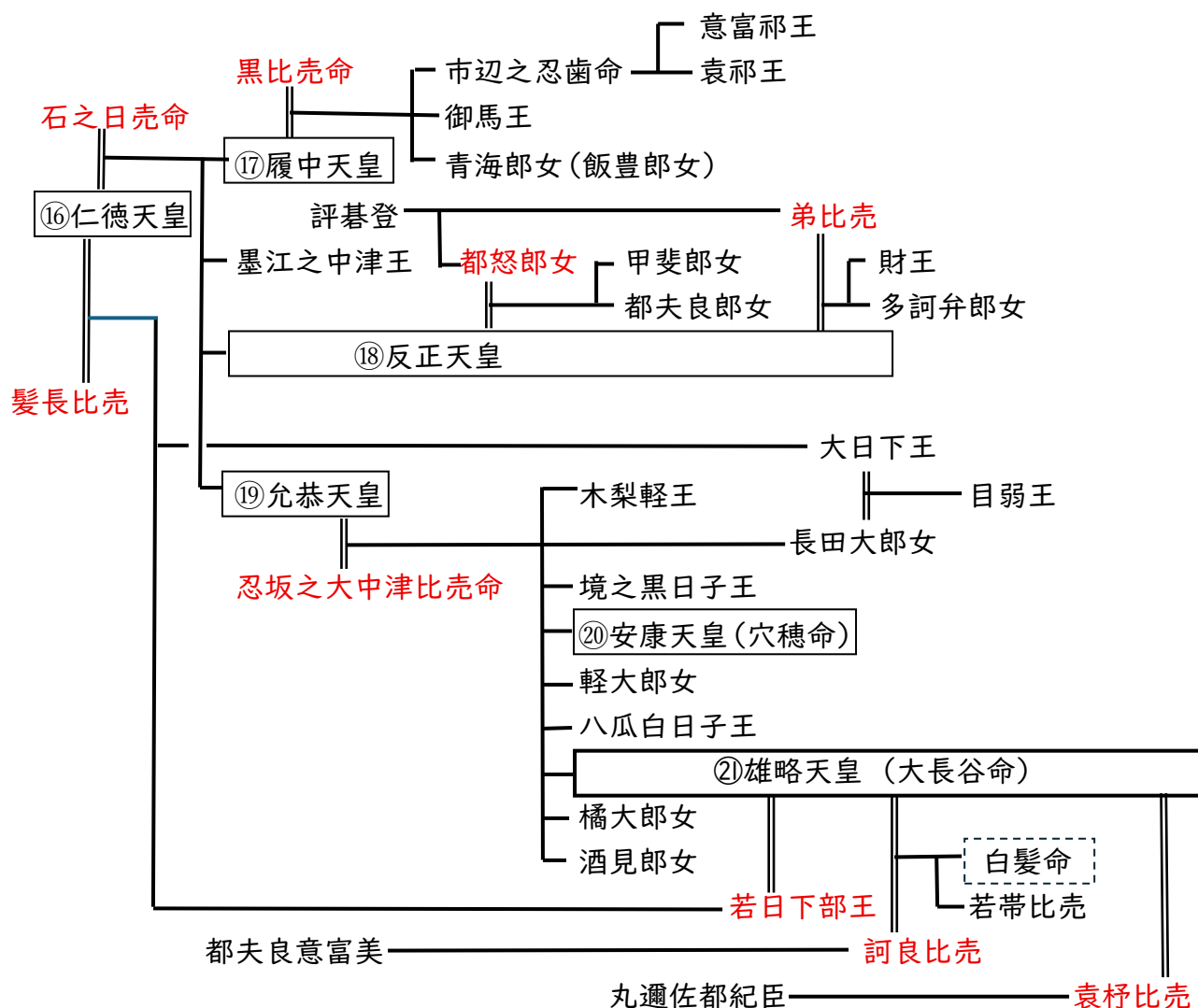
天皇が、丸邇(わに)の佐都紀(さつき)、の臣の娘●袁杼比売(をどひめ)を妻としてもらい受けるた
めに春日へ出向いた時のこと。道の途中で比売に出会った。比売は天皇を見ると恥ずかしがって岡に
逃げ隠れた。天皇は歌を詠んだ。「金鉏(かねすき)があれば、草を掻き出して比売を……」と。
このことから、この地に「金鉏の岡」と名がついたという。(この地の特定はできていないらしい)

<7> 大盃に落ちた一枚の葉

また、天皇が長谷にいて、大きな槻の木(現代の樺:けやき)の下で新嘗祭の宴を開いた時のこと。
三重からきていた采女(女官)が大盃の酒を天皇にお勧めしていたら、槻の木の葉が一枚盃の中に
落ちてきた。采女がそれに気づかずに天皇に差し上げたところ、天皇は怒って采女を打ち倒して太刀
を首に押し当てて迫った。その時、采女は命乞いをして、歌を歌った。長い歌だが結びは……

袁杼比売(をどひめ)も、「脇息のように、貴方の脇で支えたい」と歌で返した。(志都歌:しずうた)

この天皇は、124歳で他界した。陵は河内の國の多治比(たじひ)の高鷲(たかわし)に造られた。現在の「羽曳野市島泉」で、近鉄南大阪線高鷲駅の北側にあり、隣接する駅付近には仲哀天皇陵・応神天皇陵などもある。雄略天皇陵 <https://yahoo.jp/7mr-Pm>



以上